

高梁の 近代化遺産②

旧高梁尋常高等小学校(尙)

明治三十七年、中國鐵道吉備線岡山―漣井間が開業しました。高瀬舟から鉄道へ、高梁川流域交通が近代化の幕を開けたその年、妹尾友太郎ら地元棟梁たちによって「高梁尋常高等小学校」が竣工しました。



玄関ポーチは銅葺屋根。独特の木組みが印象的。竣工当時は、軒の高さや洋風の外観に注目が集まったことであろう。大屋根の上に見えるのがドーマーウィンドウ。

建物は、玄関ポーチを中心にほぼ左右対称とした「擬洋風建築」。近代教育にかける明治政府の意気込みが表現されています。大屋根には、室内換気のためのふたつの「ドーマーウィンドウ」が並んでいます。「腰壁」は、横方向に板を並べた「豎羽目」。窓の周辺や二階の壁面は、縦方向に板を重ねた「下見板張り」。外壁に塗られた淡い緑のペンキは、竣工時の再現だそうです。広い面積を占める窓に残る「手延べ板硝子」も貴重な産業遺産です。



窓上下の梁に切り込みが見られる。「面取り」である。窓の下に連なる縦板部分を「腰板」。その組み方を「豎羽目」。窓の右、段々模様に見える横板部分を「下見板張り」という。「下見板張り」は江戸時代までの日本にはなかった様式。擬洋風建築の特徴のひとつでもある。

天井を高くとつた構え、建物の隅々にまで込められた棟梁たちのこだわりには目を見張るものがあります。玄関ポーチの柱や梁、入口周辺の角材に施された「面取り」は、子供が柱にぶつかっても怪我をしないための優しい配慮と、切り込みによる優美さの演出でもあります。ポーチの天井と観音開きの扉の二箇所に見られる木組みの意匠、ポーチの柱を支える「杵石」や、基礎の花崗岩に与えられた彫りの妙もみごとです。

左右対称に置かれた階段と手摺は威厳を呈し、折れ曲がって二階に上がれば、柱のない広い天井が迎えてくれます。臥牛山で育った樅の大木を使った「桃山風二重折上格天井」です。百五年たった今でも狂いがないといえます。旧講堂の一番奥に鎮座する「奉安殿」も重要な歴史の証人です。

古い建物の保存や維持には費用がかかり、経済活動などに活かしてゆくことが重要です。「旧高梁尋常高等小学校」本館は、昭和四十七年から「高梁市郷土資料館」として再利用されています。学びの場として、たくさんの人々の思い出が残る近代化遺産が、民俗資料を収蔵する学習の場として第二の人生を送っているのです。

展示されているのは、つい最近まで私たちの身の回りであった日用品から、麦稈真田紐や煙草をはじめとする高梁の近代産業の資料まで。約三千点を数えます。その質の高さには、信江啓子岡山県立博物館学芸員も太鼓判を押します。

(文・吉備国際大学社会学部ビジネスコミュニケーション学科准教授・小西伸彦さん)

編集と発行(毎月15日発行) 高梁市総務部企画課

〒716-8501 岡山県高梁市松原通2043 電話0866(21)0210 ホームページアドレス <http://www.city.takahashi.okayama.jp/>



この印刷の一部には水質保全に有効な水なし印刷方式を採用しています。



環境にやさしい大豆油インキを使用しています。

再生紙を使用しています。